

## 結核性中耳炎の1症例

大淵豊明 橋田光一 森 貴稔 寶地信介  
永谷群司 大久保淳一 鈴木秀明

産業医科大学医学部 耳鼻咽喉科

結核性中耳炎は、一般細菌による慢性中耳炎との鑑別がしばしば困難であり、医師が診断に至るまでの期間 (doctor's delay) が遷延する傾向がある。このため結核の感染拡大という公衆衛生上の重大な問題を招く危険性があり、早期診断と治療が極めて重要となる。しかし発症初期においては結核性中耳炎に特徴的な所見に乏しく、診断に苦慮することも少なくない。今回我々は、難治性慢性中耳炎の臨床経過を呈したものの、比較的早期に診断に至った結核性中耳炎症例を経験した。症例は18歳男性で、左難聴を主訴に当科を受診した。左鼓膜所見において、辺縁に肉芽様組織を伴う単発性鼓膜穿孔と膿性耳漏が認められた。純音聴力検査では左側の混合性難聴を呈していた。中耳ターゲットCT検査において、鼓室から乳突洞にかけて充満する軟部組織陰影が認められたものの骨破壊像や石灰化像はなく、乳突蜂巣の発育も良好であった。抗菌薬の局所投与や内服投与に反応せず、耳所見は全く改善しなかった。このため結核などの特殊な感染症を疑い、肉芽組織を2度病理組織学的検査に提出したが、いずれも炎症細胞浸潤を伴う非特異的な壊死組織のみがみられ、PAS染色やZiehl-Neelsen染色で特異的な所見は認められなかった。耳漏を抗酸菌培養検査と抗酸菌核酸増幅検査に提出したところ、それぞれGaffky-7号、結核菌遺伝子陽性との結果が得られ、当科初診から1ヶ月半、発症から2ヶ月半で結核性中耳炎の確定診断に至った。近年では、典型的な臨床所見を示さない結核性中耳炎症例が増加している。このため結核性中耳炎の早期診断は難しく、本疾患の文献的な doctor's delay は1～60ヶ月 (平均10.2ヶ月) と報告されている。難治性中耳炎症例に遭遇した場合は結核性中耳炎などの特殊な感染症も念頭において診療に臨む必要があると考えられた。